

右會過每日午刻者雖爲五人可被取行於遲參之輩者不嫌親疎不可相待之茶十種懸物二種可爲當人沙汰仍所定如件

康永二年九月五日

これは五日六日七日九日十日十一日十二日の七日を會日と極め今の十種香の如く茶何種にてもものこらず飲み當たる者を一番としそれより飲み當たる數によりて番を立て七日の會をはりて勝負を定め賭を得とみゆ太平記にて見れば必ず七日を一會とするにもあらず日數は勝手次第とみえたり下の良仲等の字は十種香の目錄の如く名の一字なるべし親尊の二字は位賤き人ゆるゑ二字書なるべしさて七所を粧るは石州流の眞の臺子の七所飾のことなるべし七番菜は今の卓子の六碗菜八碗菜と云ふごとく茶湯は菜を一番二番と段々に出だすゆる七菜のことなるべし盧仝謝寄新茶歌に一椀喉吻潤二椀破孤悶三椀搜枯腸惟有文字五千卷四椀發輕汗平生不平事盡向毛孔散五椀肌骨清六椀通仙靈七椀喫不得也惟覺兩腋習々清風生とあるによりて本非の茶に多く七の數を用ふるなるべしさて本非の茶は賭の多くして財を費するゆる紹鷗いまの茶湯をはじめしなるべし

〔壺囊抄〕十服茶記錄ニ回茶ト書又回ト書ハ圓座ニシテ飲巡ス心歎廻ト書ハ誤ナリ又ハ貢茶共云豈メグル心ナランヤ十服茶法茶三種ヲ以テ各四服ヲ裏テ各一服ヲ取テ試トス仍殘所三三九服也不試茶一種アルガ故ニ是ヲ客ト云也是ヲ三種試ト云也近來ハ茶三種ヲ以テ各三服ヲ裏テ客ヲ加フ仍テ是ヲ裏攻共云无試茶共云也最初ニ聞ラート定テ札ヲ不打故ニ一種試共云也是ヲ回茶ト云回ハ顔回ガ回也聞一ヲ知十故ニ爾云也又貢茶ト云モ子貢ガ貢也子貢ハ聞一以テ知二云リ以四種成十服茶ナレバ一種ヲ以テ三服ヲ裏ムヲ聞一知二即知三ヲ也同シ茶ナルガ故ニ四ケ度ニ知所ハ劣ナレ共十ヲ知義同キガ故也